



令和6年4月
第51号

発行責任者
首都圏段戸会
会長
内山田 邦夫
編集者
広報担当
織田 利彦

第51回 総会・懇親会報告 高70回 大池 真太郎

例年よりも幾分暖かい陽の光が降り注ぐ秋晴れのもと、2023年10月28日アルカディア市ヶ谷にて第51回首都圏段戸会総会・懇親会が開催されました。高6回から高72回まで幅広い世代の会員123名が一堂に会し、オンラインでも約30名のご参加がありました。加えて、今回はコロナ禍以降初めて恩師招聘が復活し、打田秀行先生（英語）、勝田由美子先生（英語・高38回）にも会場までお越しいただきました。恩師や友人との再会に胸を弾ませながら会場の扉を開くと、そこはコロナ前の活気を取り戻しつつある和やかな空気に包まれていました。



内山田邦夫会長

総会は段戸会の内山田会長（高21回）のご挨拶から始まりました。活動がままならなかったコロナの時期も会員からの寄付や自主的なサークル活動でなんとか段戸会の繋がりが保たれたことに謝意を示すとともに、コロナからの完全脱却を目指すとともに、コロナからの完全脱却を目指す」と力強く呼びかけられました。次に、岡高同窓会の増田会長（高23回）より、同窓会の持続可能性の確保が目下の課題であり、段戸会とも連携していきたいというお話がありました。岡高の柴田校長からは、

の部活が全国大会出場を果たすなど生徒の地道な努力が花開いていることが紹介されました。「自らの幸せを追求し、それを他者にも及ぼすことができる『自利利他』の精神を実践できる人材をこれからも輩出し続けられるよう、その基盤を強固なものにしたい」と締めくくられました。その後、招聘恩師の紹介があり、続いて令和4年度会計報告・会計監査報告、再任の内山田会長を含む新四役（正副会長・正副事務局長）が承認されました。講演の時間では、東京五輪において日本代表チームの陸上競技監督を務めた麻場一徳氏（高31回）が「オリンピックの舞台裏―日本陸連強化委員会の取り組み―」をテーマにお話ししてくださいました。日本の400メートルリレーの強さの秘訣たる新アンダーハンドパスの誕生過程、日本陸連の選手育成の理念などを伺うことができ大変興味深かったです。麻場先生が繰り返し強調されたのが「スポーツを通じて社会貢献できる人材を育て、日本社会における陸上競技の価値を高め



柴田悦己学校長



増田義彦同窓会長

ていきたい」ということでした。目先の実績だけを追求するのではなく、選手一人ひとりの人生や陸上競技界の今後まで見据えた高い視座に感銘を受けました。また、今回初の試みとして、岡高の教室と総会の会場をオンラインで繋ぎ、現役の陸上部員の生徒が麻場先生に質問する時間も設けられました。先輩方が親身に若手の相談にのってくださいという段戸会の伝統が、私たちよりもさらに若い世代に伝播したことを感じる一場面でした。講演後は、桃井さん（高38回）によるピアノ演奏、同期の柘植君（高70回）による母校への力強いエール、校歌斉唱で総会は大団円を迎えました。こうして会場が温まる中で福山前会長（高19回）の乾杯のご発声とともに始まった懇親会。世代を超えて岡高での思い出話に花を咲かせたり、互いの近況を報告し合ったりする姿が会場内のいたる所で見られました。私は打田先生、勝田先生と久しぶりにお話しすることができ、卒業後も私たちのことを気にかけてくださっていたことを感じて、改めて感謝の念を抱きました。最後は、織田副会長（高26回）の「若い方の知恵や力を借りて段戸会のあるり方もどんどん進化させていきたい」とのご挨拶をもって名残惜しくも閉会となりました。



講演 麻場さん(高31)



勝田由美子先生



打田秀行先生

「首都圏段戸会」は愛知県立岡崎高等学校の首都圏同窓会です。



公式ホームページ

<http://dandokai.o.oo7.jp/>

パソコンやスマートフォンが不得意な方も、お子さんやお孫さんに操作を頼んで、一度ホームページを訪ねてみてください

首都圏段戸会

検索

第52回首都圏段戸会総会・懇親会予定

〔日時〕 令和6年10月26日（土） 13：00～17：00
〔場所〕 アルカディア市ヶ谷（私学会館）

……JR、地下鉄 市ヶ谷駅から徒歩2分

段戸サークルのお問合せ先

皆さまの参加をお待ちしています！

- “段戸囲碁会” (幹事：早川 慎吾 高32回) hayakawa@a00.itscom.net
- “段戸音楽会” (幹事：石川 航己 高58回) koki.ishikawa.49@gmail.com
- “段戸句会” (幹事：野村 親信 高16回) nomurac@jcom.home.ne.jp
- “段戸山の会” (幹事：石川 定雄 高30回) s_ishikawa44@b04.itscom.net
- “胃文化交流会” (幹事：小出 一典 高33回) kazunori.koide72@gmail.com
- “副業推進会” (幹事：加藤 研一 高30回) katosoke@gmail.com

《総会出席者の一言》

招聘恩師 打田 秀行



高70回教え子と

「誰かから受けた恩を、直接その人に返すのではなく、別の人に送ること。」です。日本陸上界の重鎮である麻場先生と岡高の現役の陸上

柘植武蔵君（高70回）から勤務先に連絡があり首都圏段戸会総会にお招きいただき

ました。転勤して2年以上が経っていて岡高から縁遠くなっていましたので、首都圏段戸会の最近の様子を知らないまま当日を迎えました。予想以上に多くの出席者がいて驚いたのですが、コロナ前はさらに多くの出席があったと聞いて、岡高のネットワークの大きさに改めて驚かされました。総会に出席させていただいて、岡高在動中に配られた首都圏段戸会の会報に寄せられた文を思い出しました。タイトルは「ペイ・フォワード」(pay forward) だったと思います。印象深く心に残っている映画のタイトルと同じだったの

競技部員とのリモートでの交流や若い同窓生と先輩たちの交流は正にその精神の表れではないかと思えます。そんな心温まる会にお招きいただいたことに感謝し、今後とも会がますます発展することを願っております。

招聘恩師 勝田 由美子

同窓会に参加して卒業生の活躍を目にするのは、教員として大きな喜びの一つですが、このたびの首都圏段戸会総会に参加させて頂いたことは、想像していた以上の驚きと収穫がありました。連絡をしてくださった70回生の柘植武蔵さんには心から感謝しています。また挨拶の中でお願ひしたことに応えて多くの方が声をかけてくださり、初めてお会いしたにも関わらず、在校生が希望を持てるような体験や思いを率直に語ってくださいましたことは感謝の念に堪えません。

学校に戻って、現在担当している3年生の一部のクラスで首都圏段戸会の話もさせてもらいました。目下の課題である受験勉強に邁進している生徒たちですが、通過点としての受験の先に広がっている自分の未来に思いをめぐらせ、表情が明るくなったように感じました。卒業してからも、各界で活躍する幅広い見識を



高38回同級生と

持った先輩たちに守られ、それをお手本としながら成長し続けることのできる岡高生は、本当に幸運だと思えます。

私自身、岡高の卒業生（38回生）であり、首都圏で活躍されている懐かしい同級生に会えたこと、またその素晴らしい演奏まで聞かせて頂いたことは、大きな刺激になりました。素晴らしい機会を与えてくださり、本当にありがとうございます。

高19回 近藤 陽一

戦争を知らない後期高齢者

我々も75年間戦争を知らない後期高齢者となった。

小学卒業時に父から「10年以上戦争がない時代に育った幸せな君達、平和な世界をつくる人になれるだろう」といわれたが、当時はピンとこなかった。戦後の悲惨さも、傷痍軍人、尋ね人のラジオ放送、進駐軍、払下げ物資、脱脂粉乳給食など僅かな記憶しかない。

その後、キューバ危機、安保闘争、チェコ侵攻、ベトナム戦争、貿易摩擦、



高19回同級生（筆者は右から3人目）



高25回同級生（筆者は前列左）

高25回 内田 寛

昨年、69歳を迎え、上京して51年になりました。憧れの早稲田大学は学園紛争に揺れていました。当初は青年弁護士を目指し、司法試験の受験を考えていましたが、大陸系の成文法とは異なる英米系の慣習法の存在に魅惑され、英会話の勉強から国際企業を目指し、結局は総合商社の三井物産に入社しました。入社3年目に学生時代から付き合ってい

大学紛争、あさま山荘事件、バブル経済と崩壊、イラン・イラク戦争、アフガン紛争など、平和ばかりではなかったが、我々は微妙なバランス感覚で、幸運にも直接的な戦禍は免れてきた。しかし、我々が生まれた頃を源とする、昨今のイヌラエル、ウクライナ、北朝鮮、台湾等「きな臭い」問題は、後輩に委ねる外ない。江戸をつくった律儀な「三河かたぎ」と岡高魂を胸に上京して奮闘してきた同窓生に、毎年集いの場所を提供する、後輩達の伝統を継承する努力にも感謝する。

個人的には、帰省する西尾の実家も既になく、三河を感じられるのは西尾小・附中・岡高の同窓会とお墓のみになった。戦争体験のない、平和ボケの老人と揶揄されようが構わない。この平和と首都圏段戸会が末永く続くことを祈念する。

た妻との結婚に踏み切り、翌年資本主義のメッカのニューヨークから社会主義の優等生の東ドイツへの連続的な出張をしました。が大変なカルチャーショックで、心身ともに疲れはてた状況の回復のために合気道の稽古を始めました。その後、携わった中国業務を縁に、現在は日中友好運動に注力し、中国の太極拳を行っており、日本の合気道精神の継続的な発展に努めております。

さて、今回の総会はまさに10数年振りの出席でした。以前は御成門近くのメルパルクを会場にしました。当時から同期の幹事を務め、打ち合わせのたびに三河弁が話せるのが大変な喜びでした。総会では皆様の熱のこもった話しぶりに徳川幕府時代から明治維新を経て変わらぬ根底から社会を支える三河武士の底力を感じ、感激を致しました。

た首都圏段戸
会総会・懇親
会に、私たち
高31回卒業生
は、講演会講
師をつとめた
麻場一徳君を
含め計7名が
参加いたしま
した。山梨学
院大学教授、
同大学陸上競
技部部长兼監
督である麻場



高31回同級生 (筆者は後列左端)

高31回 小林 淳

君の講演は、彼が日本陸上競技連盟強化委員長、東京五輪日本代表陸上競技選手団監督をつとめた経歴を踏まえた「オリンピックの舞台裏〜日本陸連強化委員会」の取り組み」と題したものでした。麻場君からは、競技者の健康や引退後の将来を視野に入れた戦略的な競技者育成方針や、競技に勝つための科学的な戦術などが紹介され、非常に興味深い内容でした。東京オリンピックでの400メートルリレー走は「攻めのバトンパス」が奏功せず残念な結果となりましたが、日本の陸上競技の将来への期待が膨らみました。また、懇親会や二次会を通じて、同窓生との交流も深まり楽しい時間を過ごすことができました。今後もこのような素晴らしい機会が続くことを期待致します。

(追記) 2024年正月の箱根駅伝では、山梨学院大学は、予選を最下位の13位で通過するという勝負強さを見せながらも、本戦では参加23校中23位という厳しい結果となってしまいました。しかしながら、麻場君の指導を受ける山梨学院大学の将来が楽しみです。

岡崎高校の凄さを実感!

コロナ前の参加率は低かったものの、会社の自部署に半分ほどの歳の若い岡高の後輩が入って来たのが嬉しくて、半強制的に同伴しての2年連続総会参加となりました。

コロナ前と比較するとまだ参加者は少ないようですが、年次別テーブルのおかげで久々に会う同期達とは懇親がしやすいですし、周囲にも前後の年次が座って

高41回 白井 利昌



高41回同級生 (筆者は右列最後尾)

るのでスムーズに会話が盛り上がり新たな繋がりも出来る、気軽さと刺激が両立した本当に素敵なお時間です。ごせる会でした。

中段に載っていること。諸先輩方のパワーと深い岡高愛を感じるとともに、我々世代ももっと頑張らねばと思いを新たに出来ました。他方、恒例のエルがとうとう福山先生から若い柘植さんに引継がれ、懐かしい制服を着た現役岡高生もオンライン参加して麻場先生に質問するなど、世代を超えた交流、脈々と受け継がれる岡高魂も感じられ嬉しくなりました。

書ききれないのが残念ですが、今回の一番の目的であった麻場先生の講演会は、本当に示唆に富むお話で感動しました。世話人会はじめ関係者のみなさん、素敵な場を提供頂き本当にありがとうございます。また来年が楽しみです。

高60回生 (2008年3月卒業)の堀尾仁志と申します。日本及び米国の公認

高60回 堀尾 仁志

会計士として、千代田区で会計士事務所を営んでおります。卒業から15年、毎年のように気になっていた首都圏段戸会に初めて参加させていただきました。

懇親会では懐かしい再会も有り、思いついた花を咲かせました。また、様々な分野で活躍されている方々と情報交換することができ、大変有意義な時間でした。皆様が素敵な方ばかりで、今後につながるよい出会いが有りましたし、岡高のあたたかな校風、岡高で過ごした楽しい時代が思い出されました。参加者の人数や世代の幅広さに圧倒され、このようなスケールの大きい会を毎年運営されている皆様を思うと感謝の気持ちでいっぱいです。

柴田校長先生にもご挨拶をさせていただきました。学校祭の変わらぬ活発な様子、高校周辺の交通事情などを知ることができました。今後も現役生の皆様が安心安全に、充実した3年間を送れることを願っております。次回の首都圏段戸会の予定も早速Googleカレンダーに登録しました。私のように長年参加を迷っている皆様にも、是非一步を踏み出していただきたいと思います。運営してください。皆様、アルカディア市ヶ谷の皆様、誠にありがとうございました。



高60回同級生 (筆者は左から2人目)

小さな研究室の窓から

高46回 朝岡 大輔

首都圏段戸会の世話人といいつつ、2023年は、コロナ禍を挟んで総会すら数年ぶりの出席となってしまった。受付のお手伝いの際、今回の寄稿の貴重な機会を頂き、何かのご参考になればと思ってお引き受けした。夏には、岡崎でも、卒業30周年の同窓会に出席させて頂き、また、首都圏段戸会も年々若い会員をお迎えし、自然と時の流れを感じる。しかし、一緒に校歌を歌うたびに、自らの出発点となる、変わらぬ場所がいつもそこにあることを、本当にありがたく思う。実務家時代を経て、御茶の水にある明治大学に研究室を開いてから、早いもので6年ほど経った。「芸術は長く人生は短し」という。一般の社会から少し距離を置いた感もある、実に地味な日々であるが、たまに世の中と接点ができる活動の断片をいくつか紹介したい。

2022年、3冊の本を出版させて頂いた。岡崎高校の図書館には「江山文庫」という卒業生の著書を集めたコーナーがあり、3冊とも寄贈させて頂いた。専門分野は広くいうと経営学である。うち1冊は英語で書いた。

このうち、『企業のアーキテクチャー』（東京大学出版会）という本は、日本経済新聞の書評欄（「活字の海で」）で紹介された。朝、新聞を開くと、なんと自分の本が出ていたのではないかと。日経1面に広告が出る際には、事前に出版社から連絡があったが、さすがに書評については出版社も知らされていない。自分が紹介されているのを読む驚きを覚える。大学の恩師が、過分な序文を書いてくださったお陰で新聞記者にも注目して頂いたのかと、その学恩に改めて感謝する。

この本の表紙には、コンセプトを表現した絵を載せたいと思っていた。出版社がプロのイラストレーターに依頼してくださり（ゲームのデザイナー画で若者に人気のある方だそう）、下絵が見事に生まれ変わった。表紙を絵から描き起こすのは、編集者も初めての経験という。こうした支えがあって、本が少しずつ世に出ていくことを知る。



3冊の著書

もう一冊の『ゼミナールコーポレートファイナンス』（日本経済新聞出版）という本は、この分野の泰斗からお声を頂いた共著である。自分の学生時代、日経の「ゼミナール」シリーズで勉強するのが定番であったが、時が流れ、まさか自分がその執筆に携わることになるとは夢にも思わなかった。広告を新聞で見かけるたびに、不思議な感じを覚える。

最後の英語の本（日本語でいうと、「財務経営と企業統治」）は、日本より海外で関心の高い議論を中心に書き、英語圏で少しかだけ反響がある。思いがけず海外の出版社から執筆依頼があり、「なぜ僕に？」と（一応英語で）聞くと、「誰かの推薦があったけど忘れちゃった」とはぐらかされる。

こうした経験を通じて、色々な方から貴重な支えや機会を頂くことで、何とかなっていることをしみじみと実感する。

こうした活動に加えて、実務家時代とは一味違った依頼があることも知る。

まず、他の大学でも講義をする機会がある。2019年から京都大学の経営管理大学院で、2020年から東京大学の公共政策大学院で講義をする機会を得た。学生の頃の自分は何事も分かっていなかったが、その中で模索する感じが、今の学生からも少しだけ伝わってきて、当時の自分の姿に重ね合わせる。大学の発

祥の地である中世のイタリヤでは、学者が講義をして各地を回ったという話をうつつらと思いつながら、人とのつながりは、足を運んでこそだと実感する。

また、証券アナリストという金融分野の資格試験があり、その試験委員として、テキスト執筆や試験問題の出題を担当するようになった。これも、自分が社会人になった頃、試験勉強したものである。当時、自分が反対側に回ることには全く思っていなかった。

公職では、縁あって、国土交通省の委員を務めている。「世界で最も高価な建物」と英国公共放送のBBCで紹介された、大阪万博の跡地に開業する1・2兆円の大規模施設の審査である。そこに、ホテル、国際会議場、日本初のカジノなどが入る。シンガポールなどで同様の施設が活況を呈している。その「光」である地域活性化と共に、「影」である依存症対策を巡っても、医療の専門家も含めた真剣な議論が交わされ、国の一つの政策の複雑さを知る。ほかに、鉄道料金の計算方法について、政府の認可方式の見直しに加わる機会も得た。鉄道料金と言えば、故郷の名鉄線などを含めて、地域の鉄道のあり方が議論される中、とても身近な話題である。知らずの間に身に付けた研究者としての観点から、そういった機会に接することが、社会と自分との新しいつながり方をもたらしている。

こうしたことから、この世の中、変化の動きは意外に速く、受け取る側から与える側に回るタイミングは、自分が思っているよりも早く訪れることを知る。自分の至らなさを顧みつつも、そうした経験が重なるうちに、手に入れることよりも、何を与えられるかに関心が移りつつ

ある自分にも気付く。「一隅を照らす」という言葉があるが、何かの形で社会の役に立ち続けたいという気持ちがある。思えば青空の下で岡崎高校の門をくぐった時から、恩師や友人とのかけがえない出会いと共に、これまで多くを学ぶ機会に恵まれた。卒業30周年を迎えた今、「若くして学べば、すなわち壮にして為すあり、壮にして学べば、すなわち老いて衰えず、老いて学べば、すなわち死して朽ちず」という言葉に励まされる。感謝を胸に、もうしばらくは「我ら若駒」の気概で進み続けたい。

ハイブリッド総会 誕生秘話

高34回 井上 由美子

2020年春、新型コロナウイルスの蔓延により緊急事態宣言が出されたことで、私たちの日常生活は大きく変化しました。人と人との対面・交流が制限され、マスク着用を強いられる毎日。桜が咲いても子ども達の新学期は始まり、不要な外出を控え、我慢がまんの日々が続きました。首都圏段戸会においても、定期総会、段戸フォーラム・各サークル活動、運営委員会や世話人会などがすべて中止。私たちは同窓会として何も出来ないという状況に陥りました。

そもそも同窓会活動は、そこに参加したい人が自主的に参加するものなので、生活必需案件ではありません。しかし、年に一度総会・懇親会に参加すれば懐かしい話に花が咲き、年齢を超えた新しい出会いも待っています。



ハイブリッド総会司会者の筆者

1972年、旧制中学愛知二中を卒業して、首都圏で活躍していた有志10名が集ったことから始まった首都圏段戸会。約半世紀の間、多くの先輩方が育んできたコミュニティに最大のピンチが訪れたのです。

2021年がスタートした頃、今後の活動について会長・副会長・事務局長・副事務局長の四役が久々にZoomでミーティングを行いました。新型コロナウイルスの猛威はいつこうに収束する気がなく、連日の感染者数を知らせるニュースは不安を煽るばかり。パソコンの画面上にみなさんのお顔が見えたときは、なんだかホッとして涙が出そうになりました。四役会の議題は、2021年秋の総会をどうするかということ。

2020年は開催見送りとしたものの、流石に2年続けて中止する訳にはいきません。この四役会で、当時の事務局長高26回織田さんが「今年の総会、どうしましょう。」と不安げに発言した途端、私は「オンラインでやりましょう。」

Zoomを使えば出来ませぬ。」と口にしていました。コロナ禍になって、講師をしている専門学校ではZoomを駆使したオンライン授業を担当していましたし、全国にいる絵本好きの有志で運営している「オンライン版絵本で支援プロジェクト」通称オンライン絵本会 (https://peraiichi.com/landing_pages/view/ehonbuonline) でも、ホストとしてZoomを頻繁に使っていた為、私の頭の中には総会をオンラインで開催するイメージが出来ていたのです。

この日は結論が出ませんでした。1ヶ月後に開かれた四役会で、アルカディア市ヶ谷のリアル会場とZoomを使ったハイブリッド総会をやってみようということになりました。会場に集まる人と、Zoomで参加する人の両方が楽しめる会にするにはどうしたら良いのか。

3月に開かれた運営委員会では、みんな知恵を出し合い役割分担も順調に進み急ピッチで準備が始まりました。

初めてZoomを使う方が不安なく参加できるように、オンライン運用サポートチーム(高8回田中さん、41回中鉢さん、52回清水さん、61回鈴木さん、34回井上)を作りしました。田中さんが、Zoomを利用する際のマニュアルを提供して下さり大変助かりました。世話人会では、高2回服部さんや高3回丹羽さんを始めとする卒業を超えた先輩方が、画面の中でニコニコ見守ってくださっているのも「大丈夫、きつとうまくいく」と思わせてくれるものでした。

着々と準備は進み、10月に入って会場セットアップの確認だけでなく、事前のZoom練習会も開催。適宜会員にメールする会員担当、高35回菅さんからの情報発信もタイミングよく行われ、第49回総会・懇親会は、初めてのハイブリッド総会として開催することが出来ました。

総会当日、私はZoom画面のコントロールをしながら司会進行を担当しました。会場参加者は、段戸音楽会の皆さんと世話人が集まり約40名。Zoomには約100名の皆さんが集まりました。中にはご家族がZoomサポートをしてくださる様子も見られました。高34回板谷さんと38回桃井さんが音声と映像を管理。桃井さんの専門的な知識と機材、板谷さんのマネジメントのおかげで、ハイブリッド総会は当初私が考えていたイメージをはるかに超えるものとなりました。感動的だったのは校歌斉唱。リアル会場にいる段戸音楽会の伴奏で、Zoom参加の皆さんが校歌を歌っているその一体感に、不覚にも感極まって涙が溢れてしまいました。

2022年の第50回もハイブリッド総会となりましたが、会場参加者を復活させるべくZoomは総会・講演会までと

し、懇親会はリアル会場での開催となりました。すると、多くの皆様から「Zoom懇親会を開催してほしい」という声が届き、2023年2月、WEB懇親会がスタートしました。(詳細は会報第50号をご覧ください。) 2023年第51回総会では、岡崎高校の生徒さんたちが数名Zoom参加するという嬉しい出来事がありました。現役高校生と総会会場が繋がり、コミュニケーションで機会が出来たことは、首都圏段戸会の可能性をさらに広げてくれるものとなりました。

私は世話人になって今年で20年になります。こんなにも長く続けてこられたのは、総会司会者というお役目だけでなく「岡崎高校で学んだというベースの元、様々な経験知を持つ人々が、年齢や業種に関係なく安心して出会える場となっている」ことこそが、首都圏段戸会の最大の魅力だと感じているからです。この原稿を書くにあたり、過去の会報(HPにPDFがあります)を改めて読み返していました。そこにも、当時の段戸会を牽引していた皆様の思いが記録されています。コロナ禍のピンチを、私たちがどんな思いでクリアしたのか。総会がハイブリッドになった経緯と意思を認め、未来の首都圏段戸会を盛り上げてくれるまだ見ぬ世話人へのメッセージとして、ここに残しておきます。

脊椎外科医(背骨医者)の個人史と漠然とした不安

高26回 清水 敬親

榛名荘病院群馬脊椎病センター
名誉センター長

脊椎外科医としてメスを置くタイミンを常に考えている時に、なぜか無性に旧友に会いたくなり、総会に久しぶりに



2001年Schulthess Klinik (Zurich) で
経口的歯突起切除術中
右: Prof. Dieter Grob 左: 筆者

参加した。その際、同期の織田利彦君から本誌への寄稿を依頼され、何となく引き受けてしまったので思いつくまま記してみる。

私は横浜生まれで現在も実家は横浜市に引っ越し、さらに小学5年生の秋に岡崎にやって来た。地元小学校に編入となったが、関西方言を口にする(手前味噌ながら)ちょっと利発そうな子は直ぐにイジメの対象となった。「ソフトボールやりに行こまゝい」と言われても「行こまゝい」行かない」としか理解できない私は、手を引く張って運動場に連れ出そうとする級友を怪訝な顔で眺めてしまふのだからイジメられるのも必然だったのかも知れない。言葉はすぐに慣れたものの、苦手な給食でのトラブルや色々が重なってイジメは卒業まで続く。このまま公立の中学校に入ったらイジメが続くのではないかと考え、イジメから逃れる最も手取り早い方法として愛教大付属岡崎中学校に逃げ込んだ。人生がリセットされた感があり、素晴らしい友人達にも恵まれ充実した思い一杯の中学生生活を送った。その後岡高へ進学するも、ここで書くべき高校時代の記憶がほとんどない。勉強もスポーツ(部活)も

恋愛も、なにひとつ一生懸命になったモノがなく、私の岡高時代の記憶は無味・無臭・無色でぼんやりした幻のようなモノなのだ。毎日「人間はどうあるべきか？ 自分は何を成すべきか？ 自分を将来はどうあるべきか？」なんて事をぼんやり考えていたことだけは覚えている。文系か理系かすら決められないのだから、なす術もない。結局現役のときは医学部を受験していない。こういう状況に陥ったのは岡高には当然全く責任はなく、個人の精神的な(?)問題だったのだと思う。結局大学には入れず、親や友人の薦めで河合塾にお世話になるのだが、チューターに「理系か文系かぐらい決めてもらわないと指導できないよ」と言われ、「全科目的に成績の良い連中がいるから、刺激を受けるためにとりあえず医進コースに入ってみれば」と進められアドバイスに従った。予備校で医学部進学を目指す連中と交流していくうちに、医学の道を自分の進路と思える様に心の変化が起きてきた(2度目のリセット)。

一旦目標が定まると急にやる気も出て、2年浪人したが群馬大学医学部に入學した(入試倍率は30倍超、当時、国立二期校医学部はどこも似たような感じ)。大学での生活はパラダイス(3度目のリセット)。クラスメートは現役生が2割以下、岩手・沖縄と全国各地から集まり、8割以上が下宿・アパート生活(つまり一人暮らし)であるため、地方のノンビリ環境とあいまって良い意味での先輩後輩の関係が濃く連携がとれていた。自分



2010年ヨーロッパ脊椎外科学会船上懇親会(筆者は右から2人目)

でも信じられないくらいラグビーに没頭した体育会系学生となり、5年生の時にはキャプテンを務めた。20歳で始めたラグビーであったが、身体はドンドン変形し(強化され)、学生時代のあだ名は当時の人気TVドラマにちなんで「超人ハルク」。ラグビー初心者を鍛え、素人集団を戦える集団に進化させる有効な練習方法の模索、等の経験は後の医師仕事にも生きることとなった。たまたま血液学の前川正教授が愛知二中の先輩であり、群馬大学では私が初の岡高卒と言うこともあり可愛がっていただいた(前川先生はのちに群馬大学長となられた)。医学の勉強自体がとても面白く感じたことは何よりもラッキーで、卒業後、母校の整形外科教室に入り、脊椎椎髄外科の道を歩み始めた。医師になったばかりの年に、ある神経症候(頭蓋頸椎移行部の中枢神経障害)に気付き10年間症例を蓄積・追跡して英文化したのだが、気がつけば自分の名前が冠された反射「Shimizu reflex (清水反射)、正確には Scapulothoracic Reflex (Shimizu)」が世界に広まることとなった。自分の名前が海外の教科書に残るなんて大した能力も無い自分にとっては嬉しい出来事で、その後の私の人生を大きく変える仕事となった。成すべき目標が定まるまでには時間を要するが、一旦目標が定まると猪突猛進頑張れるのが自分の特徴だとつくづく思い返される。海外から様々なお誘いを頂くようにもなったが、基本的にはまず単身海外に出かけて行って自分の脊椎椎髄外科分野を切り開いていった経験(国際学会、留学、海外での手術)から、ようやく50歳を超えた頃から外から見た日本について疑問を持ち、世界の将来についても思うところあるようになる。様々な分野で活躍されている多くの優秀な岡高卒業生の皆様からすれば超遅すぎの気付きであると思うが、その一部は

以下の如く；

(1) 海外留学中、私が「帰国後どうやってこの技術を後輩に教えれば良いか」と指導教授に聞くと、「なぜおまえが教える必要があるのか？おまえの競争相手を益するだけじゃないか？習いたいヤツは自分でここに来れば良いんだ。」と返答された。最近ますます「ぬるま湯化」し安定志向に走る多くの若手医師の研修実態を憂うばかりである。医学以外の分野でも同様なのか？

(2) 人混みと熱気のインドでの学会時に現地医師と話し合った時、世界一の人口を有するインドでさえその出生率は減少傾向にあると知った。豊かになるにつれ社会が結婚しにくい構造になっている」というのである。我が国の「もつと子育て支援を」というデイスカッションだけでは到底解決できない「何か」が裏に潜んでいることに我々は気付くか、あるいは気付いている人は発言すべきでは無かるか。『結婚したくない、しなくてもよい、子どもは欲しくない』という不気味な欲求がうごめいていることを。「種を保存する」という本能的意識自体が衰退しつつあるのではないかと不安になる。

(3) 温暖化と寒冷化を繰り返す大きな地球の周期的うねりに加えて、CO₂蓄積による温暖化に有効な手立ては未だ確立していない。人類は尻すぼみ(衰退期)に足を踏み入れ、滅びに向かっていくのではないだろうか？この流れに抗うべきなのか、諦めて流れに身を任せるべきなのか？漠然とした不安感に襲われる。2019年に国際学会(10th Annual Meeting of CSRS-AP)と日本側彎症学会の会長職を終え、脊椎外科医としての公的な役割は一段落した。

暗い話ばかりではない。この岡高卒業後50年間に、岡高を意識させる楽しい出会

いもあった。簡単にエピソードを紹介して終わりたいと思う。2014年に夫婦でヨーロッパ旅行した際に、偶然現地で13〜14年ぐらい先輩の岡高OGとお会いし一緒に旅する機会に恵まれた。また数年前には某大手医学系出版社から脊椎手術書の執筆依頼を受けた際、その担当者が岡高の30年近い先輩である事を知り嬉しかった。8年ほど前に名古屋大学整形外科の医師が私の病院に手術研修に来た時、岡高の後輩であると挨拶を受け嬉しく思った。私と違ってすごくマジメで実直な先生だった。一昨年、講演で関西方面に向かう途中の新幹線車内に置かれていた雑誌プレジデントをめくっていたら、どこかでお見かけしたようなお顔の写真が目にとまった。1年先輩の早川英男さん(元日銀理事)であると気がついた。その数ヶ月後にはテレビでもお見かけした。懐かしかった。早口で賢そうで落ち着きがなさそうで(先輩、失礼!)お話ししたことはなかったが記憶に残った方だった。

久しぶりに少しばかり自分の人生を振り返る事が出来た。このような機会を与えてくれた同期の織田君に感謝します。ありがとう。

山の会

段戸サークル活動報告

高30回 石川 定雄

コロナ禍から解放され約1年山の会参加者は、首都圏に加え中部や関西在住の方も合わせると55名になりました。

2023年、春に箱根の金時山、夏に加賀の白山、秋に信州の乗鞍岳と秩父の雁ヶ腹摺山への山行を行うとともに、隅田川下町、等々力溪谷、日本橋界隈の東京散策ツアーを開催しました。以前とは四季の様子が変わり、短い春秋と酷暑の夏の中での活動でしたが、頻繁に報道されたような遭難事故、未遂などなく、素敵な時間をともにすることができ、新しい仲間も増えてきました。



白山山頂白山神社奥宮前にて（筆者は右端）

果、選抜メンバーで登頂を目指しました。短時間でしたが辛かった登頂を果たした後は、肩の小屋で酒を交わし、翌朝に待ち受ける嵐の中で行動をどうしようかという心配も少ししながら、いつものおしゃべりタイムを過ごしました。翌朝の小屋付近は予報通りの暴風雨でしたが、下山バスに乗り込むとガスも切れ青空も見えてきて、僅か1日の間にも急速に進んだ紅葉に感激し、高原の温泉で湯に浸かり至福の時間を過ごし、辛くとも楽しかった山の思い出になりました。またいつか、澄み切った夜空を埋める満点の星に会いに肩の小屋を再訪したいとも皆思っています。

東京散策ツアーも、内山田会長の名がイドのお陰で毎回20名を超えるご参加を頂き好評を頂いています。一方で幹事の準備不足により、懇親会難民になりかけてしまった点は反省点でした。

夏は、前の年に豪雨とコロナ感染で参加できなかったメンバーのためのリベンジで白山に登りました。さらに、故郷の岡崎や関西作会の山の会のメンバーとの合同での登山も実現し、北アルプスなど同じような条件でアクセスできる山へ今後も一緒に行こうと、活動の輪も広がりました。当日は、天候に恵まれ、炎天下の登りとなりましたが、山頂に近づくと可憐な花々が迎えてくれ、暑さとそれまでの辛さを忘れて、頂上近くの宿舎ではいつものようにお酒を交わしながらの楽しく素敵な時間を過ごすことができました。

一方、秋は、乗鞍岳に嵐の中の登頂となりました。登山口までの車窓からは青空を背景にくっきりとした稜線をみて期待感が高まりましたが、2千7百メートルの登山口に到着すると、待っていたようにガスがやってきて返りは真っ白になり、稜線は風も強かったので、相談の結

このように安心してゆるい山行などができるのは、年代を超え集まったメンバーが岡高という結び付きで互いを尊重し助け合いながら行動できていることによるものと思います。東京散策ツアーなどの中で、山登りにも参加しようという方からも、何を準備したらよいかというお話も聞かれます。今後どんな山登りをするかに合わせて準備できるように情報を提供することもできますので、気軽に相談頂き、山の活動にも参加頂きたいと思っています。



白山山頂でのおしゃべりタイム

令和5年 首都圏段戸会 世話人名簿		副会長・企画・広報 副会計		副事務局長・企画 副事務局長・会計・企画		事務局長・企画・情報 副会長・企画		広報・書記 副事務局長・会員		会計		副事務局長・企画 副会計		広報 企画 情報	
(高3回)	丹羽弘	(高26回)	織田	(高46回)	朝川	(高47回)	岡川	(高49回)	大藤	(高50回)	朝川	(高51回)	朝川	(高52回)	朝川
(高6回)	山馬	(高27回)	岸崎	(高48回)	大藤	(高49回)	大藤	(高50回)	大藤	(高51回)	大藤	(高52回)	大藤	(高53回)	大藤
(高7回)	山馬	(高28回)	酒井	(高54回)	朝川	(高55回)	朝川	(高56回)	朝川	(高57回)	朝川	(高58回)	朝川	(高59回)	朝川
(高8回)	山馬	(高29回)	藤井	(高60回)	朝川	(高61回)	朝川	(高62回)	朝川	(高63回)	朝川	(高64回)	朝川	(高65回)	朝川
(高9回)	山馬	(高30回)	石川	(高66回)	朝川	(高67回)	朝川	(高68回)	朝川	(高69回)	朝川	(高70回)	朝川	(高71回)	朝川
(高10回)	山馬	(高31回)	米田	(高72回)	朝川	(高73回)	朝川	(高74回)	朝川	(高75回)	朝川	(高76回)	朝川	(高77回)	朝川
(高11回)	山馬	(高32回)	石原	(高78回)	朝川	(高79回)	朝川	(高80回)	朝川	(高81回)	朝川	(高82回)	朝川	(高83回)	朝川
(高12回)	山馬	(高33回)	堀内	(高84回)	朝川	(高85回)	朝川	(高86回)	朝川	(高87回)	朝川	(高88回)	朝川	(高89回)	朝川
(高13回)	山馬	(高34回)	鈴木	(高90回)	朝川	(高91回)	朝川	(高92回)	朝川	(高93回)	朝川	(高94回)	朝川	(高95回)	朝川
(高14回)	山馬	(高35回)	板本	(高96回)	朝川	(高97回)	朝川	(高98回)	朝川	(高99回)	朝川	(高100回)	朝川	(高101回)	朝川
(高15回)	山馬	(高36回)	糸井	(高102回)	朝川	(高103回)	朝川	(高104回)	朝川	(高105回)	朝川	(高106回)	朝川	(高107回)	朝川
(高17回)	山馬	(高37回)	小菅	(高108回)	朝川	(高109回)	朝川	(高110回)	朝川	(高111回)	朝川	(高112回)	朝川	(高113回)	朝川
(高18回)	山馬	(高38回)	菅原	(高114回)	朝川	(高115回)	朝川	(高116回)	朝川	(高117回)	朝川	(高118回)	朝川	(高119回)	朝川
(高19回)	山馬	(高39回)	川西	(高120回)	朝川	(高121回)	朝川	(高122回)	朝川	(高123回)	朝川	(高124回)	朝川	(高125回)	朝川
(高20回)	山馬	(高40回)	井田	(高126回)	朝川	(高127回)	朝川	(高128回)	朝川	(高129回)	朝川	(高130回)	朝川	(高131回)	朝川
(高21回)	山馬	(高41回)	大立	(高132回)	朝川	(高133回)	朝川	(高134回)	朝川	(高135回)	朝川	(高136回)	朝川	(高137回)	朝川
(高22回)	山馬	(高42回)	中長	(高138回)	朝川	(高139回)	朝川	(高140回)	朝川	(高141回)	朝川	(高142回)	朝川	(高143回)	朝川
(高23回)	山馬	(高43回)	五松	(高144回)	朝川	(高145回)	朝川	(高146回)	朝川	(高147回)	朝川	(高148回)	朝川	(高149回)	朝川
(高25回)	山馬	(高44回)	筒西	(高150回)	朝川	(高151回)	朝川	(高152回)	朝川	(高153回)	朝川	(高154回)	朝川	(高155回)	朝川
(高25回)	山馬	(高45回)	筒西	(高156回)	朝川	(高157回)	朝川	(高158回)	朝川	(高159回)	朝川	(高160回)	朝川	(高161回)	朝川

編集後記
 コロナ禍明けの総会が昨年10月に開催され、ハイブリッド形式もすっかり定着しました。現在、会員には高齢の方が多く、また遠方の方から、今後このスタイルで行われるかと思えます。今回の総会では、ご尽力で恩師招聘が復活しました。さらに岡高エールを福山前会長(高19)に代わり、柘植さんが務めました。これは大幅な若返りとなり、陸上部から麻場さんの講演をぜひとも聞きたいとの要望をいただきました。岡高現役生とオンライン化による質疑応答が交わされたことも特筆すべき事項です。こうした総会のオンライン化については、本号でその舞台裏を井上副会長(高34)に語っていただいております。

さて、総会全体は大池さん(高70)から報告をいただきました。統一して「出席者の一言」は各世代6名の方から、さらには初の試みとして招聘恩師としてご出席された先生からも頂戴しました。本号後半はコッポレートファイナンス等の分野で活躍されている朝岡さん(高46)、「上述の」オンライン「仕掛人」こと井上さん(高34)、脊椎外科医の清水さん(高26)から寄稿いただきました。とりわけ井上さんはコロナ禍において、当時事務局長だった私の背中を押して、総会はもとより首都圏段戸会のみならず、オンラインイベントのオンライン化を推し進めた功労者です。最後は、頻りに活動している山の会からレポートをいただきました。山の会では登山と東京散策を兼ね、毎月のように企画されています。関心のある方はぜひともご参加ください。(織田)